「男、突っ走る！」

第101回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	(24)	『オフィスツリーイン』代表
国枝	佐代子	(59)	『スリジェネ』総合プロデューサー
国枝	茉奈	(27)	佐代子の娘
山中	敦夫	(44)	劇団主宰者
田所	俊子	(63)	市民映画プロデューサー
本村	晴臣	(54)	音楽プロデューサー
橋岡	直政	(48)	舞台俳優
住吉	真由美	(42)	ダンス講師
山森	直海	(19)	『スリジェネ』メンバー
大坂	美央	(17)	『スリジェネ』メンバー
阿川	緑	(30)	『スリジェネ』メンバー
麦沢	愛花	(20)	『スリジェネ』メンバー
坂本	寿梨	(20)	『スリジェネ』メンバー
鬼頭	翔子	(73)	ミュージカル出演者
弘田	洸	(23)	ミュージカル出演者
鈴岡	ゆりえ	(19)	ミュージカル出演者
山川	裕作	(20)	ミュージカル出演者
北	まひる	(22)	ミュージカル出演者
月島	藍那	(22)	ミュージカル出演者
大森	泰明	(58)	ミュージカル出演者
加原	美穂子	(35)	ミュージカル出演者
加原	千世	(13)	ミュージカル出演者
林	亜里沙	(12)	ミュージカル出演者
赤澤	隆太	(11)	ミュージカル出演者
辻松	翔	(11)	ミュージカル出演者
大坂	理央	(12)	ミュージカル出演者、美央の妹
野倉	浩太	(22)	元『スリジェネ』メンバー
富永	茜	(23)	元『スリジェネ』メンバー
藤田	昇平	(22)	元『スリジェネ』メンバー

1　中央交流センター・全景

N「十月最終日の土曜日、ついに『神様が願うまで』の本番当日がやってきました」

2　同・楽屋前の廊下

雅也がトイレから出てくる――猫の衣装に身を包んだ亜里沙、隆太、理央、その他小学生たちがそれぞれの楽屋から出てくる。

雅也「おお、みんな完璧にできたねぇ」

理央「これで完璧に猫になれる」

隆太「ニャー」

雅也「ニャー」

亜里沙「ねえうっちー、写真撮ろうよ」

雅也「良いよ」

と、泰明が通りかかる。

雅也「やっさん、写真お願いできますか？」

泰明「ＯＫ（と雅也からスマホを受け取る）」

雅也が隆太を抱っこする――その周囲に集まる亜里沙、理央、子どもたち。

泰明「撮るよ、はいチーズ」

と、ボタンを押す。

3　同・ホール

ステージ前に集まっている雅也、佐代子、茉奈、山中、田所、本村、橋岡、住吉、昇平、直海、美央、緑、愛花、寿梨、翔子、洸、ゆりえ、裕作、まひる、藍那、泰明、美穂子、千世、亜里沙、隆太、翔、理央、その他キャストやスタッフたち。

佐代子「いよいよ本番となりました。短い稽古期間の中で大変だったと思いますが、今日はその稽古の成果を存分に発揮していただければと思います。（と山中に）ではヤマさんお願いします」

山中「はい。皆さん、ついに泣いても笑っても本番です。これだけのキャストが一人も欠けずに本番を迎えられたことは奇跡に近いと俺は思ってます。二ステージ、一生懸

命頑張りましょう。よろしくお願いします」
一同「よろしくお願いします」
佐代子「じゃあ、うっちー。円陣の掛け声、お願いします」
雅也「はい」
一同、大きな円陣を組む。
雅也「では初めての方が大半だと思いますので、簡単に説明をします。僕が『未来に向かって、僕ら』と言ったら、皆さんは右足をポンッと出して『スリジェネ！』と言ってください。これが『スリジェネ』の円陣になります。では皆さん、よろしくお願いします。……未来に向かって、僕らッ」
一同「スリジェネ！」
と、拍手をして、それぞれに「よろしくお願いします」と言う。

4　同・ホール前

来場客の列ができている――佐代子と茉奈がチケットを受け取りながら、対

応をしている。

佐代子「こちらからお入りください」

茉奈「（名簿をチェックしながら）はい大丈夫です、中にお入りください」

5　同・ホール

来場客の誘導をしている本村と住吉。

本村「空いてる席にどうぞ」

住吉「足元お気を付けください」

6　同・女性楽屋

それぞれ準備をしているキャストたち——直海、美央、愛花、寿梨がメイクをしている。そこへ、緑が入ってくる。

緑「皆さん、今晩、参加できる人だけで打ち上げをしますけど、参加する方いますか？」

直海、美央、愛花、寿梨を含め、何人かが挙手をする。

緑「（数えて）はい、オッケーです」

7　同・ホール

会場が暗くなっている。

照明席で準備をしている昇平。

昇平「頑張れよ、みんな……」

関係者席に座っている田所と橋岡。

橋岡「いよいよ、本番ですね」

田所「そうね。二ステージ、みんなには頑張ってもらいたいわね」

×　×　×

舞台上だけ明るくなっている。

制服姿の直海とゆりえが話している。

ゆりえ「ねえ、千紗ってさいつもこの神社で手合わせてるよね」

直海「ここの神社で手を合わせると、神様が願いを叶えてくれるんだって。沙也加もやってごらんよ」

ゆりえ「私はそういうの信じないもん。じゃあねぇ（と舞台上手に去っていく）」

と、スマホの着信音のＳＥが流れる―

―ゆりえと入れ替わりで裕作が入って

くる。

直海「（電話に出る演技で）もしもし尊？」

裕作「（電話に出る演技で）地区予選通った。このまま頑張れば、甲子園出れる」

直海「甲子園か……尊は昔から野球少年だったもんね」

と、舞台が暗転し、下手からグローブとボールを持った翔が出てくると、ボールの壁打ちを始める。

下手の翔にだけ照明が当たる――そのスポットライトの操作をしている昇平。

翔「俺はいつか甲子園に出るぞ！」

×　×　×

会場後ろから舞台の様子を見ている茉奈。

×　×　×

直海と割烹着の翔子が話している。

翔子「はい、いつものお饅頭ね」

直海「おばさん、ありがとう」

翔子「関心するわね。いつも千紗ちゃんは、

神社にお参りして」
直海「願い事を叶えるためですから」
翔子「何、願い事って？」
直海「また教えます」
×　×　×
下手の音響卓から見守るように見ている山中。
×　×　×
手を合わせている直海――すると効果音と共に、上手から洸が出てくる。
直海「え、あなた誰？」
洸「俺、見れば分かるだろ、神様だよ」
直海「あんたが？　え、チャラ……」
洸「失礼な。俺は何千年とこの神社の神をやってきてるんだよ」
直海「え？」
洸「あ、ちょっと静かに」
と、エプロン姿の美穂子が入ってくる。
美穂子「（手を合わせて）どうか、うちの店が商売繁盛しますように」

と、去っていく。

洸「あのおなご、いつも自身で営んでいるたこ焼き屋の繁盛を願ってお祈りに来ている。そろそろ、現実にしてあげても良いかな」

直海「どうやってやるの？」

洸「人間の力が必要だ。お前……千紗と言ったな」

直海「はい」

洸「お前がやれ」

直海「え？　神様が叶えるんじゃないの？」

洸「魔法も何もない俺に、そんなことできるわけないだろ」

×　×　×

関係者席で見ている本村。

×　×　×

制服姿の直海、ゆりえ、寿梨、愛花、美央、千世が話している。

ゆりえ「アレンジたこ焼きか……」

寿梨「何かあるかなぁ」

愛花「難しいね」

美央「インスタ映えするものとかかな」
千世「他に何かあるかな」
直海「みんな、ありがとう」
と、軽快なＢＧＭが流れ、歌いながら
踊り始める一同。

８　同・男性楽屋
おにぎりを食べている雅也、洸、裕作、
泰明、その他キャストたち。
雅也「無事に一ステージ目終わりましたね」
裕作「午前の部からあんなに客がいるなんて
思いませんでした」
泰明「すごかったよね」
雅也「市の広報に公演の告知記事が載ったで
しょ。多分あの効果があると思いますよ」
と、ノック音がする。
雅也「はい」
と、亜里沙母が入ってくる。
亜里沙母「休憩中すいません」
雅也「まあ、アリサママ。どうも」

亜里沙母「いつも娘がお世話になってまして」
雅也「いえいえ。どうかされましたか？」
亜里沙母「うっちー、今日打ち上げがあるって聞いてます？」
雅也「打ち上げ？　いえ、打ち上げは今日の公演の様子を撮影した映像の上映会も兼ねて、日を改めてやることになってます。その点は、改めて国枝さんから今日連絡が行くと思いますけど」
亜里沙母「ミドリさんが取りまとめて、今日参加できる人だけで打ち上げをやるって聞いたんですけど」
雅也「じゃあ、非公式のものなんですかね。僕はミドリさんから何も聞いてませんけど」
亜里沙母「そう……。子どもたちは夜遅くなるといけないからお断りしようかと思ってます。明日のハロウィンライブにも見に行きたいですから」
雅也「そうでしたか」
亜里沙母「ミドリさん、演出助手として子ど

もたちの個人練習に行くなんて言っておきながら、来たのはたった一回だったんですよ。それなのに、ヤマさんたら子どもたちのクオリティが上がったのはミドリさんのサポートがあったからだなんておっしゃるから」

雅也「はぁ……」

亜里沙母「あら、ごめんなさい。うっちーにこんなこと言ってもしょうがないわね。じゃあ、午後もよろしくお願いします（と出ていく）」

雅也「……」

洸「うっちーも大変ですね」

雅也「保護者チーム、演出チーム、運営チーム、いろんなところから愚痴聞かされるんだもん、たまんないよ。だからサンドバックのうっちーって言われるんだろうね。ゴタゴタも板挟みもたくさんです……」

9　同・廊下

雅也と佐代子が話している。

佐代子「そう……、やっぱりミドリさんが」

雅也「キャストの人たちには、大方声かけたそうです」

佐代子「うっちーは？」

雅也「何も聞かれませんでした。アリサママに言われて初めて知ったんですから」

佐代子「あくまで非公式だから、もしうっちーも参加するなら、その事キャストの人たちに伝えといて」

雅也「はい……」

10　同・ホール

開場となり、来場客が入ってくる――

浩太と茜が入ってきて、空席に座る。

×　×　×

新聞を読んでいる泰明と洗濯物を畳んでいる緑――直海が入ってくる。

直海「ただいま」

泰明「お帰り。おい、新聞見たぞ。尊君、地

区予選出場じゃないか」
緑「甲子園出場間違いなしね。ママ、応援に行っちゃおうかしら」
泰明「パパも行く」
直海「やめてよ、二人して。まだそうと決まったわけじゃないじゃん」
×　×　×
観客席で見ている浩太と茜。
×　×　×
直海、上手から入ってくる。
直海「猫を探せなんて、無理に決まってるじゃん」
と、袋を逆さにして作り物の魚を取り出す――猫衣装の亜里沙、隆太、理央たち小学生が軽快な音楽と共に可愛らしく踊りだす。
×　×　×
関係者席で見ている住吉。
×　×　×
上手はけ口でスタンバイをしている雅

也、まひる、藍那、その他出演者たち。

雅也「始まるね……」

まひる「これが、最後ですね」

藍那「二ステージ目ですから、全力出し切りましょう」

と、軽快な前奏が流れ始め、まひるが元気よくステージ上に出ていく。続けて、腕を組んだ雅也と藍那がスキップをして、ステージ上に出ていき、更に出演者たちも楽しそうにステージに上がっていく。

リズミカルなダンスを披露する一同。

×　×　×

会場後ろから舞台の様子を見ている佐代子。

×　×　×

カーテンコールになり、一同が舞台上に集まっている。

直海、ステージの真ん中にやってきて、

直海「本日は、ありがとうございましたッ」

一同「ありがとうございましたッ」

拍手をする観客たち。

11　同・搬入口

キャストスタッフ一同が揃っている。

佐代子「皆さん、今日は本当にお疲れさまでした。二ステージ見させていただいて、本当に素敵な公演だったと思います。実は、今日はどうしても皆さんに感謝の言葉を述べたいと言う方にお越しいただきました」

と、ドアが開き、小説家・沖島友が入ってくる。

沖島「皆さん、『神様が願うまで』を書いた、沖島友です」

一同、どよめきが起こる。

沖島「出版社の方に、どうしてもこの公演を見たいとお願いして、本日二ステージとも見させていただきました。私の小説をこんなにも素敵に実写化していただいたこと、心から感謝申し上げます。ありがとうござ

いました」

と、頭を下げる――拍手をする一同。

沖島、佐代子に一礼し、去っていく。

佐代子「では、ヤマさん。一言お願いします」

山中「はい。皆さんお疲れさまでした。原作者ご本人からこんな素敵な言葉をいただけて、とても光栄に思いますし、こういう形で脚本演出をさせていただけたことはとても名誉なことだと思っています。俺が伝えたいことは、稽古の時に皆さんに伝えたつもりです。皆さん一人ひとりには、良い個性がありますので、その個性を生かしてこれからも頑張ってください。本当にありがとうございました」

拍手をする一同。

佐代子「それでは最後に、メンバーリーダーのうっちー、お願いします」

雅也「え？　また考えてませんでしたよ」

山中「大丈夫、うっちーならもういける」

雅也「はい。まずは皆さん本当に、お疲れさ

までした。初回稽古から約二ヶ月半、短い稽古期間の中で個人練習含めて、本当に皆さんの努力の結晶だと思ってます。『スリジェネ』だけのメンバー公演と違って、いろんな世代の人たちが集まる公演というのは初めてのことでした。今回改めて感じたのは、特に子どもたちなんですが、しっかりとフォローをしてくださっている保護者の皆様の力が必要不可欠であるということを気づきました。これで終わってしまうのは、本当に名残惜しいんですけれども、皆さんの力で無事に本番を終えることができたのは、まぎれもない事実です。キャストのうっちーとして、そして運営の木内として、心から皆さんに感謝申し上げます。本当にありがとうございました（と深々と頭を下げる）」

拍手をする一同。

佐代子「では、今日はこれで解散にしたいと思います。公式の打ち上げについては、改

めて全体ＬＩＮＥで連絡をします。お疲れさまでした」

解散したり、記念撮影などをしていく

一同――隆太が雅也に抱き着く。

雅也「りゅーた、頑張ってね」

隆太、雅也から離れない。

雅也「りゅーた？」

隆太、顔を上げると、その目には涙が浮かんでいる。

雅也「どうしたの、りゅーた」

と、隆太を抱っこする――亜里沙と翔がやってくると、

亜里沙「うっちーと離れるのが寂しいんだよね」

翔「しょうがねえやつだな」

雅也「大丈夫だよ、りゅーた。また打ち上げで会えるから」

隆太「……」

と、浩太と茜がやってくる。

浩太「うっちー」

茜「うっちー」
雅也「二人とも来てくれたんだ。（と直海たちに）コウタととみー来てくれたよ」
隆太を抱っこした雅也、直海、美央、愛花、寿梨、昇平が浩太と茜の前に集まる。
浩太「お疲れ、みんな」
茜「すごく良かった」
雅也「ありがとう、来てくれて」
茜「ナオ、主演お疲れ様。あれだけ出演シーンあって、よく頑張ったね」
直海「必死だったよ、覚えるの」
浩太「さすがはナオだよな」
雅也「そりゃ、『スリジェネ』のエースだもん」
直海「まあ、それも明日で終わりだけどね」
寿梨「私たち、この公演が終わったら『スリジェネ』卒業するって、国枝さんに伝えたの」
茜「そうだったの」

浩太「まあ、それが良いよ」
昇平「うっちーも、言ったんだもんな」
雅也「うん」
茜「え、うっちーも？」
雅也「うん。大変な時期にもあったけど、良くも悪くもここでは良い経験させてもらった。何よりみんなっていうメンバーにも出会えたし、この作品に出演したから、りゅーたにも会えたしね」
まだ泣いて黙ったままの隆太。
浩太「何か、兄弟みたいだな」
雅也「そう。本当に、可愛くてしょうがない。俺も別れるのが惜しいもん」
笑っている一同――雅也、隆太を見ながら微笑んでいる。

つづく